

司式:中川 信明
奏楽:吉田千鶴子

前奏:「キリストは死の縄目につき給い」(G. ベーム)

招詞:眠りについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる。(エフェ5:14)

讃美歌:326「地よ、声たかく」

罪の告白・赦し

聖霊を求める祈り

朗読聖書①イザヤ書 53. 6

06 わたしたちは羊の群れ

道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。

そのわたしたちの罪をすべて

主は彼に負わせられた。

朗読聖書②ルカによる福音書 24. 13-35

◆エマオで現れる

13 ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、

14 この一切の出来事について話し合っていた。

15 話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。

16 しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。

17 イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。

18 その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在しているながら、この数日そこで起こったことを、あなただけをご存じなかったのですか。」

19 イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。」

20 それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。

21 わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださいと望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。

22 ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、

23 遺体を見つげずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。

24 仲間の者が何人が墓へ行ってみたのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」

25 そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、

26 メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」

27 そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。

28 一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。

29 二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。

30 一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡

しになった。

31 すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。

32 二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。

33 そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、

34 本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。

35 二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

祈祷

イエス・キリストと私たちの父なる神さま、聖名を賛美します。どうか御国を来たらせてください。

復活日の朝、私たちはこの礼拝堂に、神さまによって一人ひとりの名前を呼ばれて集められ、あるいはライブ配信を通して礼拝に与ることを赦されております。

私たちはこの一週間、イエス・キリストの十字架の痛みと苦しみに思いを馳せてきました。またイエス・キリストを十字架への死に至らせたのは、人間の私たちの罪であること、イエス・キリストは十字架の死を通して私たちの罪を贖い赦してくださったことを改めて思い知らされました。そして今日、イエス・キリストは復活されることによって死に打ち勝ち、罪に勝利されたこと、私たちに新しい生を与えてくださったことを喜びをもって受け止めております。

この後、佃牧師によって語られる御言葉の説き明かしを通して復活の喜びを鮮やかに確認させてください。どうか語る佃牧師に聖霊の助けを切にお祈り申し上げます。

またこの後、洗礼式が予定されております。一人の者が新たに信仰の告白をしますが、聖霊によって聖別し、浄めてください。さらに本日は聖餐の恵みに共に与りますが、復活のイエス・キリストが主催する食卓に喜びをもって臨みたいと思います。

しかしながらこの世界、人間社会は罪に満ち、人間の罪を最たるものである戦争がイランや湾岸諸国、ウクライナで続き、多くの人々の命を奪い、生活を破壊し続けております。神さまどうか、愚かな戦争を止めさせ、彼の地に、あなたの正義と平和を打ち立てて、苦しむ人々の痛みを和らげてください。また自然災害によって、あるいは貧困や差別によって苦しんで人々に寄り添い、その苦しみを取り除いてください。

私たちの教会はこの復活日礼拝をもって新しい年度へと踏み出しました。先週まで担任教師として仕えてくださった大谷昌恵牧師が病のために辞任され、今年度は牧師一人体制で歩むこととなりました。労の多い佃雅之牧師をお支えいただくとともに、教会員が一つとなって宣教と教会形成の歩みが続けていくことができますようお導きをお願いいたします。私たちの教会自体が欠けの多い、力弱い群れであります。時に道を外し迷い出ることもあるでしょうが、悔い改めつつ、あなたの指し示す道に従って歩いていくことができますよう、この一年、お導きをお願いいたします。

本日の復活に礼拝のことを思いながらも、高齢のため、病のため、家族の介護のため、仕事のために出席できない教会の肢々一人ひとりをお守りください。神さまの恵みが一人ひとりに豊かにありますようお祈り申し上げます。このお祈りを、イエス・キリストの聖名を通してお献げいたしま

す。アーメン。

洗礼式 吉田理恵子(青年会)

合唱:「かがやくこの朝」 聖歌隊

説教 「イエスは生きておられる」

佃 雅之

十字架で死なれ墓に葬られたキリストは甦られました。私たちは今日も復活の主に招かれて礼拝を献げています。今朝は教会が大切に読み続けてきました『エマオ途上』と呼ばれる物語を通して、“復活の主は、どこで、どのように、私たちに会われるのか”、聖書の御言葉から共に聞きたいと思えます。

「二人の弟子が、エルサレムからエマオという村へ向かって歩」いていました。彼らはこの時、キリストの復活の知らせを聞いていましたが、まだ信じる事ができませんでした。十字架によって全てが終わったと考え、希望を失い、迷いの中を歩いていたのです。絶望の中にあつた二人のもとへ主ご自身が近づいて来られました。エマオへ向かっている二人はペトロやヨハネのような十二弟子ではありません。一人は「クレオパ」、もう一人は名前も記されていません。ルカがこの物語を書いた意味はここにあります。主は特別な人だけの主ではありません。私たち一人ひとりに近づいてくださる主なのです。

この二人の弟子は十字架の出来事によって不安と恐れを感じていました。“自分たちも捕らえられるかもしれない。キリストに従った日々は終わった。もう何も起こらない。” そう思いながらエルサレムを離れて行ったのかもしれない。おそらくエマオには彼らの家があり、元の生活に戻ろうとしていたのでしょう。しかし二人は、「この一切の出来事について話し合っていた。(14 節)」と記されています。「一切の出来事」というのは、“キリストが捕らえられ、裁かれ、十字架につけられて無残に殺された”という事実、さらにそのことに加えて、日曜日の「朝早く墓に行った」仲間の婦人たちが、「『主は生きておられる』と告げられた(23 節)」という知らせ、これら全ての出来事を話し合っていた。つまり彼らは信仰を完全に捨てたのではなく、キリストのことを、尚、考え続けていたのです。この二人が、今歩いている『エマオへの道』は、信仰を捨てた人が歩いた道ではありません。信仰が揺れている人が歩いた道です。そして復活の主はまさにその道の上に立っておられます。しかし二人の目は遮られていて、イエスだと分かりませんでした。主と一緒に歩き始めても、話しかけられても分かりません。傍におられるのに分からないのです。聖書はその時、「暗い顔」(17 節)をしていたと記しています。二人はその人に向かって、エルサレムで起こった出来事を語り始めます。

「ナザレのイエスは」神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。しかし「祭司長たちや議員たちは、十字架につけてしまったのです。」そして彼らはこう言いました。「わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださいと望みをかけていました。(21 節)」彼らの語る言葉が全て過去形であつたところに深い失望が現れています。十字架の出来事からすでに三日が過ぎていました。なぜ神は何もなさらないのか、神は何故沈黙しておられるのか、彼らが「暗い顔」をしていたのは、“ナザレのイエスが死んだ”という事実だけではありません。神が何もしておられないように思えたからです。

私たちも途方にくれ、何をしたいのか分からない時があります。家庭のこと、仕事のこと、教会のこと、様々な問題に押し潰されそうになることもあると思えます。しかしその原因はただ一つです。主イエスが見えなくなってしまうことです。けれども私たちが、主を見失っているように感

じる時も、主が私たちを見失うことは決してありません。主は常に、私たちの傍に立ち、共に歩んでくださっているのです。

彼らはすでに『イエスは生きておられる』という知らせを聞いていました。主御自身が“苦しみを受け、三日目に甦る”と語っておられたことも憶えていた筈です。それでもなお、信じる事ができなかったのは何故でしょうか。自分の思いの中で“死んだ人が生きてはいるはずがない、そんなことはあるはずない”と決めつけてしまっていたのかもしれませんが。私たちも時に、主の言葉を信じきれなくなる時があります。人生の中で“神は本当におられるのだろうか”と思ってしまうような時もあります。しかしそれは、主が働いておられないわけではありません。私たちが気づかないだけです。主が共におられないわけではありません。私たちの目が閉ざされているだけなのです。

主は目を遮られ、「暗い顔」をしている弟子たちに近づき、「物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち(25 節)」と言われました。彼らは旧約の預言者たちが何を語ったか知っていた筈です。しかし、神が預言者に与えた言葉の全てを信じることは出来ていなかったのです。苦しむメシア、十字架に付けられる救い主、そして死から復活するイエスを信じる事ができませんでした。しかし神が求めておられるのは、私たちに都合の良いことだけではなく、理解できないことも、受け入れがたいことも、神の御言葉の全てを信じることです。

復活の主が言われた「すべてを信じられない者たち(25 節)」、この言葉は私たちにも向けられています。私たちは自分の願いを叶えてくださる神は信じやすいのです。しかし、思い通りにならない時、信じる事が難しくなります。その時、“私たちは、目が遮られ、「暗い顔」になってエルサレムを離れ、エマオへ向かってしまう”、それが私たちです。それでも主は、私たちの思いをはるかに超えて私たちに近づいて来られるお方です。主は聖書の言葉を通して、“今も生きておられる”ことを私たちに示してくださいます。そしてその御言葉を悟らせてくださる主の霊の働きによって私たちの心は開かれていきます。私たちの魂は、実に頑なであり、同時に脆いものです。少しの言葉で傷つき、少しの出来事で折れてしまう。しかしその頑なで脆い魂は、主の御言葉と主の霊によって解きほぐされていきます。堅く閉じていた心が少しずつ開かれ、乾ききっていた魂が潤されていくのです。人の言葉ではなく、主の御言葉によって、人の力ではなくて主の霊の働きによって、魂が力づけられ、燃やされていくのです。

彼らが主をはっきりと知ることになったのは道の上ではなく食卓においてでした。聖書はこう記しています。「一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。(30 節)」これは『最後の晩餐』の時の主の姿です。しかしこの二人はその席にいた者たちではありません。それにも拘らず、彼らは自分の家の食卓でパンが裂かれた時、目が開け、イエスだと分かったのです。

私たちは毎日、あるいは日に何度も『主の祈り』を祈ります。“日用の糧を今日もお与えください”と祈ります。“自分の力で生きていてはいない、生かされている命なのだ”ということを忘れないためです。今日も食べる事ができること、今日も生きていて、それは当たり前ではなく、主が与えてくださる命です。私たちは日々の食卓を通して、『主は生きておられる』ことを知ることができます。

主イエスの復活を信じる信仰は、復活という出来事を頭で理解することではありません。主イエスと共に食卓につき、主イエスが分け与えてくだ

さるパンを受け取り、それに与る、その交わりの中でこそ与えられるのです。私たちの信仰は、この体をもって受け取り、味わいながら歩んで行くものであるからです。

その時、さらに不思議なことが起こります。「すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。(31節)」それは主がおられなくなったということではありません。もうエマオの道のように、目に見える姿で主が歩いてくださるのではないのです。これからは、弟子たちは目に見えるイエスによってではなく、御言葉とパンによって主と共に生きていくのです。御言葉の中で、パンを裂く食卓の中で、そして教会の交わりの中で、主はご自身を表わしてくださるのです。その時から、弟子たちは目には見えなくても主と共に常にいてくださることを知るようになったのです。それは、弟子たちの信仰が見える主から共に居られる主へと導かれていくためです。

教会の礼拝では会衆の目に見えるのは牧師です。しかしその背後におられるのは主イエスです。私たちは人の言葉を聞いているのではなく、主の御言葉を聞く者として、ここに集められています。今日の箇所が登場する二人の弟子は、復活後の時代を生きる教会、私たちの信仰生活の姿を先取りしています。最初に起こったことは、弟子たちが主を見つけたことではありません。主の方から近づいて来られたのです。ここに信仰生活の始まりがあります。信仰とは、私たちが主を見つけて始まるのではなく、気づかないうちに、主が既に私たちに近づき、共に歩いていてくださることから始まるのです。私たちがまた、主の姿を見ることはできません。しかし気づかないだけで主はすでに私たちの歩みの中におられ、共に歩いていてくださるのです。

エマオの弟子たちは、キリストが「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか(32節)」と言いました。ここに書かれている「心」、この字は二人でありながら原文では単数形で一つのものとして表現されています。キリストによって二人の心が一つにされたのです。御言葉によって心一つにされる群れ、それが『教会』です。

『エマオ途上の物語』は“イエスに出会った”で終わるではありません。二人の弟子がエルサレムに戻ることで、この物語は完成します。何故でしょうか。どうしても伝えずにはいられない出来事が起こったからです。復活の主に出会った人は『キリストの証人』とされるのです。二人の弟子は真夜中にもかかわらず、もう一度エルサレムへと出発しました。聖書はここで「出発した(33節)」と記しています。この言葉は“立ち上がった(ἀνίστημι)アニステーミ”という意味の言葉です。倒れていた者が「立ち上がる」、失望していた者が「立ち上がる」、そして「死者が甦る」ことを表す言葉でもあります。復活の主に出会う時、人は「立ち上がり」、向きを変え、再び歩み出すのです。

私たちにも夫々の歩みがあります。悲しみの中を歩んだことも、迷いの中にあつたことも、失望して歩いていた時もあったでしょう。しかし、復活の主は私たちに近づき、共に歩み、ご自分を示してくださいませ。私たちはもはや一人で歩くではありません。復活の主と共に歩くのです。

キリスト教の信仰とは、復活という出来事を知ることにとどまりません。今も生きておられる主が、私たちに近づき語りかけ、私たちの人生の中に共にいてくださる。その主と出会い、共に生きること、それが私たちの信仰です。

この教会に集められた私たちがまた、復活の主に出会っているのです。

どのような重荷を担っていても、どのような困難な中にあっても、主は私たちを見捨てることなく、共にいてくださいます。失望の中でエマオへ向かっていた弟子たちが希望をもってエルサレムへと引き換えしたように、私たちが主へ導かれて新しい歩みを始めましょう。“主イエスは生きておられます。”この礼拝に招かれ、復活の主と出会われた皆さん、イースターおめでとうございます。お祈りを致します。

聖なる神、主がエマオへ向かう道を歩いていた弟子たちに近づいてくださったように、私たちの人生の道にも近づき、共に歩んでください。主よ、私たちの生涯にわたって共にいてください。御言葉によって私たちの心を燃やし、目を開いて、あなたが共におられることを悟らせてください。この教会に生きて働いて、私たちの歩みを希望へ向かう歩みへと変えてください。私たち一人ひとりを、復活の主に出会った者として立ち上がらせ、この世へと遣わし、福音を証しするために用いてください。主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:517「神の民よ」

聖晚餐 使徒信条の告白

和解の挨拶

讃美歌:81「主の食卓を囲み」

献金・感謝(大塚明子)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

慈愛に富み給う父なる神さま、主イエスのご復活をお祝いするこの日、教会に集められ、またライブ配信により、敬愛する兄弟姉妹とともに尊い聖名を賛美し、礼拝をお献げすることができましたことを心より感謝申し上げます。

御言葉の説き明かしにより、新しい一週間の心の糧をいただき、受難週を過ごした後の本日の聖餐は、改めて主イエスの御苦しみとご受難、孤独の中での贖いの死を遂げられたことを強く思われました。新たな命の糧を与えられて自らの罪を悔い改め、主イエスはいつもともに歩いてくださることに感謝しつつ、御言葉に生かされて歩む日々を過ごすことができますように、聖霊の導きを豊かにお与えください。

本日、この群れに新たな姉妹が与えられましたこと心より感謝申し上げます。共に励まし合いながら信仰の道を歩むものとならせてください。受洗された吉田理恵子さんとそのご家族の上に、神さまの祝福とお導きが豊かにございますようにとお祈りいたします。

日々私たちに必要なものを備えてくださる神さまに感謝いたします。あなたから与えられたものの中から今、御前に感謝と献身の徴としてお献げいたしました物を、清めて御用のためにお用いください。

主イエスが教えてくださった『主の祈り』を共に祈ります。「主の祈り」…アーメン。

讃美歌:92「主よ、わたしたちの主よ」

派遣と祝福(司式:主は言われます。「私は誰を遣わすべきか。会衆:私がここにおります。私を、お遣わし下さい。司式:「父が私をお遣わしになったように、私もあなた方を遣わす」と主は言われる。キリストの平和の使者として行きなさい。)

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたが一同と共にあるように。アーメン。

報告：受洗者紹介ほか。

後奏：「キリストは死の縄目につき給い」(J.S.バッハ)